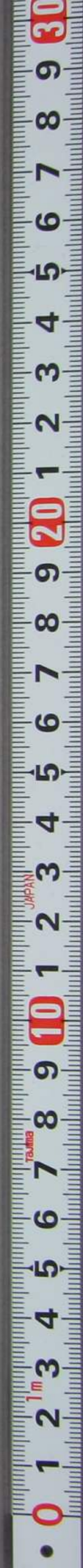


經濟新聞紙附錄譯

4096

12



114
A3169



經濟新聞紙附録ノ譯 倫敦刊行

大正十一年四月

○ 一千八百七十七年第十二月一日第一号
 左ノ書翰ハ去ル十一月十五日ウキルムラ
 ッボン氏ヨリ贈ラレシ所ニシテ乃チ輸入額
 ノ輸出額ニ超過シタル事ト其之レヲ償フノ
 利害得失トヲ説キ以テ其償フ所ノ性質ヲ論
 究シタルモノニシテ頗ル切實緊要ナリトス
 就中其第二條三條ハ益スル所最モ甚カラス
 故ニ諸君ノ冀望急ナルヲ以テ之レヲ本日ノ
 附録トナス然レ氏論説ノ可否ハ吾輩責ニ任
 セス

拜啓 吾輩項日勸商局ノ公報ヲ讀ムニ一千八百七

十一年ヨリ同ク三年迄三ヶ年間、輸出入額兩十
カラ相増加シタルノ甚ク速ナルヲ見ル、吾輩同
袍悪ノ賀セサルヲ得ニヤ、因テ吾輩竊ニ感觸スル
所ノモノアリテ茲ニ寄書ス、抑、輸出入額共、増加
スルト雖モ輸出ノ増額ハ輸入ノ増額ニ及ハサル
ト遠シ、夫レ貿易ノ利害ハ唯輸出入額ノ増減ニ由
ルト言フハ世ノ通論ナレド、吾輩ハ断シテ之レヲ
謬論ナリトス、然レモ今吾輩ノ説ク所ハ固ヨリ此
謬論ヲ取正セント欲スルニ非ス、又輸入額超過ノ
迅速ヲ論スルニモ非ス、吾輩ハ專ラ輸入ノ輸出ニ
超過シタル點ノ成果ノ如何ヲ論セント欲スルナ
リ
勸商局ノ公報ニ據ルニ、一千八百六十年ヨリ同ク

七十四年迄十五ヶ年間ノ輸入ノ輸出ニ超過シタ
ル額ハ四千萬磅ヨリ七千二百萬磅ニ及ヘリ、今之
レヲ平均スレハ一歳ノ超過額五千六百萬磅トナ
ルナリ、毎歳此ノ如キ超過額ヲ償フノミナラズ當
時外國ニ貸出ス所ノ金額甚ク多シ、是レ以テ我般
富ナルヲ知ルニ足レリ、尚ホ一千八百七十四年ノ
超過ハ七千二百萬磅ニシテ、同ク五年ニハ九千二
百萬磅トナリ、又同ク六年ニハ一億一千八百萬磅
ノ多キニ登レリ、本年七千七百七十八萬磅ヨリ十
月三十一日迄ニ二千二百五十萬磅ニ及ビ、今
此割合ヲ推シテ一歳ノ額ヲ算計スレハ一億四千
二百萬磅トナルナリ、實ニ驚クヘキノ巨額ナラス
ヤ、乃チ一千八百七十四年ヨリ本年迄ノ超過額ヲ

通計スレハ七千萬磅ナリ、若シ之レヲ償フニ人民
得ル所ノ利潤ヲ以テスルキハ全ク豊富ヲ増スヘ
ケレト、此巨額ヲ奈セン、其レ此ノ如クシテ吾輩何
ヲ以テカ疑團ヲ抱カサルヲ得ンヤ、夫レ國に果シ
テ旺盛殷富ニシテ能ク此巨額ヲ償フノ力アリヤ、
若シ其力アテサレハ國費過當ニシテ終ニ出ツル
ノ入ルヲ償フニ足ラス、積年ノ後如何ナル成果ヲ
生スルヤ未タ知ルヘカラス、抑此疑團ヲ解カンニ
ハ宜ク其輸出ニ超過スル所ノ精算ヲ視テ然後ニ
之レヲ償フニ何等ノ物ヲ以テスヘキヤヲ推究セ
スンハアルヘカラス、サレハ勸商局公報ノ結局ヲ
視ルハ疑團ヲ解クニ於テハ一大要點タリ、而シテ
之ヲ視ントスルニハ先ツ其文ニハ如何ナル主意

ヲ持テルヤ、將タ何等ノ情状ト何等ノ正實ヲ有ス
ルヤヲ熟考セスンハアルヘカラス、又確然輸出入
ノ平均ヲ通計センニハ暫ク此公報ノ成立スル源
因ニ依リテ推考セスンハアルヘカラス、抑右公報
ニ掲ケタル輸出品ノ價格タルヤ、本邦ニ着船シタ
ル節ノ時價ニ據テ算計シタルモノナルカ故ニ、右
價格中ニハ其運賃雜費並商人ノ利益等ヲモ含ム
ヘキ筈ナレト、素ト外商ヨリ輸入シタルニアラス
レテ即チ我商人我船舶ヲ以テ輸入シタルモノナ
レハ、其雜費運賃等ハ已ニ我商人ヨリ我商人ニ拂
ヒテ其費用ノ金圓ハ毫モ外國ニ流出セサルカ故
ニ、其輸入品ノ實價ヲ算スルニ右運賃雜費等ヲ除
去シタルモノト信スルナリ、而シテ輸出品ノ價格ハ

之レヲ船積スル節ノ時價ニ據リテ算計シタルモ
ノナレハ外國ニ着船スル迄ノ運賃雜費並商人ノ
利益等ハ右價格中ニ算入セサル筈ナレハ是亦外
商ノ之レヲ輸出スルニ非スレテ我商人我船舶ヲ
以テ輸出シ己ニ外商ヨリ運賃其他ノ雜費等ヲ得
タルカ故ニ其金圓ハ畢竟我國內ニ流入シタルモ
ノナレハ輸出品ノ實價ヲ計ルニハ其外商ヨリ得
タル所ヲ加ヘタルモト信スルナリ蓋シ我國ノ
如ク輸出入トモ我船舶ヲ以テ漕運スル處ニテハ
其輸入ノ輸出ニ超過シタルモノヲ算計シテ即チ
其超過シタル額ヲ以テ真ニ我ヨリ外國ニ償フヘ
キモノト定メシハ運賃雜費等ハ宜ク加除セス
シハアルヘカラス且此事タル多ク熟考家ヲシテ

屢試驗セシメタリト雖モ奈セン到底確實ナルモ
ノヲ得ル能ハサルヲ故ニ他ノ差妥當ナル方法ヲ
求メサルヘカラス乃チ其妥當ナルモノヲ得ント
ニハ一千八百七十四年以來輸入額ノ増加シタル
ヲ以テ之レヲ償ヒタルモノモ亦増加シタルヤ否
ヲ推究セシムルハアルヘカラス即チ左ニ之レヲ償
ヒタリトスル所ノモノヲ示スヘシ

第一條

一真ノ輸出額及ヒ我商人我船舶ヲ以テ運輸シタ
ル所ノ賃銀

第二條

一真ノ輸出ニ因テ得ル利潤ノ外別ニ外國ニ於テ
得ル所ノ利潤

第三條

一外國ニテ發行シタル証券類ヲ購求シテ得ル所ノ利潤

第四條

一本邦ニテ發行シタル証券類ヲ外國ニ賣却シタル金額

第五條

一本邦ノ貨幣ノ輸出額

但、他國ノ貨幣ノ我カ手ヲ歷テ輸出シタルモノハ除クヘントス

右第一條ヨリ第三條迄ハ全ク人民ノ家入ニシテ、第四條及ヒ第五條ハ全クノ資財ナリ、故ニ輸入額ヲ償フニハ必ス第一條ヨリ第三條迄ノ家入ヲ以

テスヘントス、抑、第四條第五條ノ貨幣及ヒ証券類ヲ以テ之レヲ償フ片ハ資財ヲ減スルカ故ニ、從テ國家ノ衰頹ヲ來サ、ルヲ得サルナリ、然レモ右家入ヲ以テ之レヲ償ハントニハ、近來輸入額ノ増加シタルニ準シテ其家入モ亦増加セシヤ否ヲ計ラズ、ハアルヘカラス、即チ左ニ之ヲ説明スヘシ

第一條ヲ詳論ス

己ニ前ニモ陳スル如ク、勸商局ノ公報ニ記シタル輸出品ノ價格ハ、之レヲ船積スル節ノ時價ニ據テ計リタルモノナレモ、二三年前ニ比スレハ、其利潤モ減少シ、將タ貿易モ近年ハ衰微シタレハ、其利潤モ從テ減セシナルヘク、又運賃モ二三年前ニ比スレハ、其割合一層廉ナルカ故ニ、我船舶ノ得ル所ハ必

不増サ、ルナルヘク、且親シク實際ノ情状ヲ視ル
ニ、外國ノ大商ノ常ニ我國産ヲ需ムル者已ニ富ミ
タルカ故ニ、彼レノ市場ハ漸ク盛大ヲ致シ、我輸出
額モ亦増加シ、從テ利潤モ亦多キヲ加ヘリ、然レモ
輸入俄ニ七千萬磅ニ超過シタルヲ視レハ、假令輸
出ハ少シク増加シタリトモ、到底輸出入ノ對等ヲ
得ル丁能ハサルナリ、又輸出ノ増額ニ就キ吾輩、
注意セズンハアルヘカラサル點アリ、乃チ一千八
百七十二年同ク三年ノ輸出額ハ非常ニ増加シタ
リト雖モ能ク其原因ヲ推考スレハ、是レ自ラ弊害
ヲ招クモノトイフヘキカ、何トナレハ、我財主漫リ
ニ外國政府ニ巨額ヲ貸与シ、彼レヲシテ種々ノ工
業ヲ起サシメタレハナリ、就中米國ノ鐵道ノ如キ

ニハ頗ル巨額ヲ使用シタリト雖モ、其巨額ハ數年
ヲ歷ルニ非サレハ、財主ノ手ニ還ル丁ナカルヘク、
又米國內乱ノ為メニ其鑛山ノ事業止ミタルカ故
ニ、彼レ大ニ我石炭及ニ鐵ヲ要セリ、然ルニ石炭鐵
ノ如キハ全ク我内地ニ産出スル所ノモノナルヲ
以テ、之レカ輸出ノ増加スルハ極メテ要點ナレハ、
最モ注意セズンハアルヘカラス、然レモ輸出品ノ
中ニハ其實質ヲ外國ニ需メ内國ニ於テ更ニ製造
シテ再ヒ之レヲ輸出スルモノアリ、是等ハ假令輸
出金額ハ増スト雖モ、決メ石炭鐵等ノ如キ内地ノ
産物トハ同視スヘカラス、蓋シ輸出ノ増加シタル
原因ニアリ、即チ財主ノ巨額ヲ濫貸シタルヲ以テ
外國ヨリノ購求ヲ多クシタルト、石炭鑛等ノ輸出

増加シタルトノニツ是レナリ、抑我ニ自由貿易ノ
制フルキハ、外國ハ益事業ヲ盛ニシ、愈殷富ヲ致シ、
轉、競争ノ意ヲ張大ニシ、終ニ我事業ヲ壓制スヘク、
又輸入ノ超過ヲシテ益多キヲ加ヘシムル所ハ、數
年ナラスンテ其額非常ノ高點ニ達スヘシ、故ニ獨
リ輸出ヲ盛ニシテ之レカ増額ヲ償ハント欲スル
者ハ、實ニ意ヲ注カスンハアルヘカヲサレナリ

第二條ヲ詳論ス

是條ハ輸出ニ因テ得ル所ノ外別ニ外國ニ於テ得
ル所ノ利潤ナレトモ、其利潤能ク此巨額ノ超過ヲ償
フニ足ルヘキ點ニ達シタリトハ信スル能ハス、何
トナレハ、吾輩ハ外國政府、寄託ヲ受ケテ數隻ノ
船舶ヲ製造シタリシカモ、外國政府ハ之レヲ償フ

了能ハスシテ我財主ニ就テ負債シ以テ之レヲ償
ハタル程ナレハ、彼レ造船事業ノ盛ナル景状ナシ、
故ニ此レヨリ生スル所ノ利潤モ亦増サ、ルナル
ヘシ、又外國船主ノ囑ニ因テ多クノ船舶ヲ製造シ
タリシニ、此時ニ方テ適、英蘭愛爾蘭ノ二國凶年ニ
シテ一旦ハ穀類ヲ運送スル為メニ繁忙ナリシカ
モ、噸税ノ課額増加シタルヲ以テ、故ニ利潤ハ少シ
モ増サス、而カモ現ニ事業ニ關ニシテ船舶空ク礙
宿スルモノ多キノミナラス運賃モ騰貴セサルヲ
以テ、造船ヨリ生スルノ利潤ハ曾テ増サ、ルナリ、
我船舶各國ニ往來スルモノ甚ク盛大ニシテ航海
ノ特權ヲ得タルモノ、如シ、然レモ其盛大ヲ致シ
タルハ、スエズ、及、ノ一大漕河ヲ鑿開シタルノ後

ニシテ其以來ハ航海ノ事業甚々困難ヲ極メ止ム
ヲ得ス運賃ヲ減シタルヲ以テ其事務ハ繁忙ナリ
シカモ此レヨリ生スル所ノ利潤ハ毫モ増サハル
ナリ

又本邦ハ資財己ニ多ク且各國ノ信任厚キヲ以テ
天下ノ物産一旦ハ先ツ我ニ輻輳シ又各國ニ發出
スルカ故ニ恰モ歐羅巴中央ノ銀行ノ如ク誠ニ繁
昌ナレハ其利潤モ從テ多カルヘキ筈ナレモ其實
ハ然ラス何トナレハ漕河鑿開以來ハ外國ノ航海
盛大ニナリテ我ト相競争スルノ國多ク出ニタレ
ハナリ曩日ニハ東洋ノ物産道ヲ本邦ニ取リテ歐
洲大陸ニ行クモノ陸續トシテ絶エザリシカ漕河
鑿開ノ後ハ丹行ニテ直チニ大陸ニ達スルヲ得ル

カ故ニ我商人ハ嚮ノ如ク利潤ヲ得ルコト能ハス是
ニ由テ考レハ我商人他國ノ間ニ往來シテ得ル所
ノ利潤ハ必ス減シタルナルヘント信ス又我商人
ノ苦情ヲ聞クニ獨リ右利潤ノ減シタルヲ訴フル
ノミナラス外商日ニ月ニ我カ手ヲ籍ラスシテ東
洋ノ物産ヲ得ル者鮮カラズ故ニ此利潤モ亦四年
以來ハ増加シタリト信スル能ハサルナリト

第三條ヲ詳論ス

是條ハ外國ニ金ヲ貸與シ或ハ外國ノ証券ヲ購求
スル等ニテ得ル所ノ利潤ニシテ即チ我資財ヲ減
セズシテ輸入ノ増額ヲ償フノ最ニ見易キモノナ
リ乃チ一千八百七十二年ヨリ同ク四年迄外國へ
貸出シタル額ト外國ノ証券類ヲ購求シタル額ト

ヲ算計スレハ其額甚ク大ナレ氏又頗ル名實ヲ異
ニスルモノアリ蓋シ我商人ハ貿易ノ外別ニ資財
ヲ使用スルコト多ク則チ或ハ外國政府ニ貸與シ或
ハ外國ノ鐵道會社ニ貸與シ或ハ砂糖耕作ノ為
ニ貸與スル等其他之レニ類似ノモノ枚舉ニ違
ラス又我印度領ニ於テ耕作製造等盛大ニナリ
タル所以ハ全ク本邦ノ資財ヲ以テ之レヲ助ケタ
レハナリ此他東洋諸國ニ貸與シタルモノ鮮ナカ
ラサルナリ蓋シ東洋諸國ニ出スモノハ財主ヨリ
直チニ負債者ニ貸與スルコト稀ニシテ大抵ハ英
蘭蘆各蘭ニテ銀行先ツ之レヲ借入レ而シテ印度ノ
支店ニ於テ之レヲ製造者耕作等ニ貸與スルナ
リ然ルニ是等ハ皆諸業繁盛ノ時ニ方テ施為シタ

カ故ニ不注意ニ貸與シタルニノ鮮ナカラスサ
ハ或ハ辨償シ難キモノアリ或ハ負債者ノ處分
宜シカラサルカ為メニ其額減縮セルモノアリ加
旣ナラス東洋ノ銀貨ノ價格花ニ為替証書ノ割引
利低折シタルヲ以テ外國ニ使用スル金額幾分カ
減少シ從テ其利潤モ減セサルヲ得サルナリ是ヲ
以テ第三條ノ家入ハ更ニ増サハルナリ今斯ク明
言スルハ外國ニ金ヲ貸與シ或ハ外國ノ証券類ニ
依テ生活スル者等近年能ク節省ヲ務ムルト其此
種ノ思考トニ據テ証スルナリ
以上ニ論シタル所ノ輸入額ヲ償ヘキ三個條ノ
家入ノ効驗ヲ推究スルニ鑛山製作及ニ耕作等ノ
進歩ニ使用シタル資財ヲ故ラニ計ラサリシカ氏

其額少小ナラズシテ大ニ事業ヲ進歩シ國産ヲシテ盛大ナラシメタルヲ疑ナシ又樓閣殿堂ノ建築ヨリ以テ諸般ノ家屋製造場等ヲ築造シテ一ハ國益ヲ謀リ一ハ人民ノ安居ヲ謀リタル者少ナカラズ且何レモ輸入ヲ償フニ於テ間接ニ一大關係ヲ生セリ然レモ輸出入ヲ較計スルニ至テハ直接ナラサルヲ以テ之レヲ加算スルヲ得サルナリ右ニ陳スル如ク一千八百七十四年以來ハ第一條ヨリ三條迄ノ家入増加セサルヲ以テ他ノ二條即チ本邦ニテ發シタル証券又ハ本邦ノ貨幣以テ償フヨリ他ニ據ルヘキモノナカルヘシ果シテ然ラハ焉ソ資財ノ減セサルヲ得ンヤ又實際上ノ説ヲ聞ケハ給料ノ騰貴ト其他ノ事故トニ由テ一層

外國産ヲ購求スヘキ力ヲ増シタルカ故ニ國費漸ク嵩ミ豊富ノ増加ヲ止メ又ハ其以前ニ蓄積シタル資財ヲ減殺セリト今夫レ之レニ答辨センニハ尚ホ一層詳細確實ナル精算ヲ得ルニアラハ其可否ヲ決スル能ハサルヲ以テ姑ク之レヲ他日ニ譲リ先ツ目今ノ資財ノ減少セルヤ否ヲ見ントスルニハ一千八百七十三年ヨリ本年迄ノ貨幣ト証券トノ市價ノ確實ナル精算ヲ得レヲ要トス因テ深ク之レヲ檢スルニ其原因頗ル多シ蓋シ一千八百七十三年以來ハ通貨市場ニ盈溢シタルカ為メニ資財ハ已ニ減少センナリ曾テ袁桐ノ色ヲ表ハサズ今乃チ其盈溢シタル原因ヲ視ントニハ宜ク三十年以來貿易上ニ起リタル變動ヲ考フ

七
歳
省

ヘントス、就中一千八百六十三年以來、十年間ハ
工作進歩ノ極度ナルヲ以テ其變動ヲ考フルニ於
テ最モ緊要ナリトス、則チ當時鐵道汽船電線ノ如
キハ天下ニ滿布シ百般ノ事業忽チ興リタルヲ以
テ天下ノ需用立ニ辨シ、己ニ之レヲ辨スルノ後ハ
資財ヲ使用スルノ道ナクシテ殘餘ノ富ヲ生セサ
ルヲ得ズ、且百貨ノ運輸音信ノ往復更ニ簡便ニナ
レルヲ以テ貿易上ノ利潤多キヲ加ヘタルノミナ
ラズ節省ノ念ヲ生シテ大ニ冗費ヲ省却シタリ、又
東洋貿易ノ景況ヲ觀ルニ、スエズ大漕河ノ繁盛開以
來、頗ル費途ヲ省却シタル所アリ、此レヨリ先ニ
ハ東洋ノ國產一旦本邦ニ輻輳シテ更ニ又之レヲ
大陸ニ運送シタルナリ、譬ヘハ支那產ノ絹布ノ本

邦ニ達スルニハ三四月ヲ費マスヘク、又之レヲ
又ニ大陸ニ輸出スルニハ幾何カ時日ヲ費ヤサ、
ルヲ待サリシカ、開河以來ハ僅ニ一ヶ月ニシテ大
陸ニ達スルヲ得ラル、ナリ、此ノ如クナレバ獨リ
時日ノミナラス又資財ノ費途ヲ減スル丁少ナカラ
ズ、是レ通貨ノ盈溢スル一原因ナリ
又従前ハ我財主多ク外國政府ニ金ヲ貸与シタリ
シカ、間、負債者ノ不信ナル者アルカ故ニ之レヲ責
收シテ更ニ商業ニ用井ントスレバ、全世界ノ通商
ニ必要ノ通貨ハ己ニ餘リアルヲ以テ愈使途ニ苦
ノリ、是又盈溢ノ一原因ナリ
又我商人多ク外國ノ証券ヲ購求シタレバ、間、外國
ノ内乱等アルカ為メニ其信據セラル、ヤ否ニ疑

ヲ起シ之レヲ他國ノ商人ニ賣却シテ得タル所ノ
金額少ナカラス此レカ為メニ亦通貨ノ盈溢ヲ來
スナリ

是ニ由テ考フレハ通貨ノ本額ハ減少セシナルハ
シト雖モ適通貨市場ニ盈溢シタルカ為メニ能ク
其跡ヲ掩ヒ却テ豊富ヲ増殖シタルカ如キ外額ヲ
顯ハセリ然レモ其實ハ右三ヶ條ノ家入毫モ増
ハリシカ故ニ乃チ資財ヲ減シテ輸入ノ超過ヲ償
ヒタルナルヘント信ス論者或ハ言ハン通貨減ス
レハ必ス衰穉ノ色ヲ顯ハサハルヲ得ス今ノ家ノ
産ニ就テ之レヲ觀ルモ家産減スレハ衰穉ノ景狀
ヲ顯ハサハルニ其色ヲ見スト然レモ已ニ其色
ヲ顯ハサハルニアラス看ヨ夫ノ銀行ノ算計書ヲ

ぬ十三

一千八百七十六年九月一日ノ調ニハ貨幣及ヒ金
銀條ノ額三千三百零二一千五百四十一磅ナリシ
カ同ク七十七年十月三十一日ニハ二千二百七十
九萬一千四百四十二磅ニ減セリ其減額殆ト三
分ノ一ナリ豫備金モ亦一千九百二十一萬八千六
百八十六磅ナリシカ九百六十七萬八千九百九十
七磅ニ減セリ其減額三分ノ一弱ナリ為替割引セ
亦從テ騰貴シ二分ヨリ五分ニ登リタリ又本邦ノ
証券ヲ佛國ノ財主ニ賣却シテ得タル所ノ金額甚
タ鮮ナカラス然ルニ其額タルヤ常ニ兩國貿易上
ノ為替金ノ用ヲナスナリ然レモ終ニハ之レヲ償
ハサルヲ得サルナリ又米國理財ノ景況ヲ觀ルニ
尚ホ通貨ニ關涉スルモノアリテ幾分カ減少スヘ

一
二

ク、彼此以テ資財ノ減少シタル知ルヘシ、然レモ其結局ハ甚ク憂シ易キヲ以テ精算ヲ得ルニ難シトス、故ニ左ノ三ヶ條ヲ實際上ノ要點トシテ此論題ヲ結ハントス

第一條

全國一般ノ理財上ニ就テ考フレハ國費過當ナルカ故ニ資財減少シタリ

第二條

資財減少スルカ故ニ不融通ヲ醸シ人民困難ニ堪ヘス、因テ止ヲ得ス節省ノ念ヲ生スヘシ

第三條

通貨久シク市場ニ盈溢シレモ、後速ニ減少スレハ、必ス不融通ヲ醸スヘク、且為メニ何等ノ患害ヲ

來スヤモ測ルヘカラサレハ、注意家ハ宜ク常ニ其此ヲ慎ミ幾分カ貨幣ヲ蓄ムヘントス

如
字

天
鼎
心

